

人の心に寄り添う 医療人になる

第19回 英語は「筋トレ」である

株式会社イーオン代表取締役社長
み やけ よしかず
三宅義和

昭和医療技術専門学校校長
さんどう まさる
山藤 賢(インタビュアー)



三宅義和(みやけ よしかず)氏 プロフィール

1951年、岡山県生まれ。大阪大学法学部卒業。株式会社イーオン代表取締役社長。1985年イーオン入社。人事、社員研修、企業研修などに携わる。その後、教育企画部長、総務部長、イーオン・イースト・ジャパン社長を経て、2014年イーオン社長就任。一般社団法人全国外国語教育振興協会元理事、NPO 小学校英語指導者認定協議会理事。趣味は、読書、英語音読、ピアノ、心身統一合気道。著書に「対談！日本の英語教育が変わる日」「対談②！日本人が英語を学ぶ理由」(共にプレジデント社刊)がある。

山藤：本日は「人の心に寄り添うシリーズ英会話編」です！ 私はよく読者目線での要望を聞くのですが、英会話に弱いという医療人は案外多く、ぜひそのような内容をというリクエストを受けて、今回の対談といたしました。これから東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けても、外国人観光客がますます増えてきますし、医療現場でも英語に触れる機会は増えていくことでしょう。英語でのやり取りも人の心に寄り添う一面があります。また英語という側面だけではない人と人とのつながりのアプローチも、三宅社長のお話やお人柄からは、いつも垣間見えます。今日もたくさんの気

づきと生きるためのヒントがいただけると楽しみにしてきました。私と三宅社長は以前に本連載で対談させていただいた藤平信一会長(心身統一合気道会)の道場でご一緒させていただいている間柄です。先日もおいしいお寿司をご馳走様でした(笑)。今回は大変お忙しいところ無理を言って、この対談を実現していただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

編集室：本日はよろしくお願いいたします。

三宅：こちらこそよろしくお願いいたします。

編集室：初めに、株式会社イーオン様と三宅先生ご自身について簡単にご紹介いただけますでしょうか？

【本連載の形式】各界で著名な先生方への山藤先生のインタビュー(対談)にて、組織で働くこと、チーム内でのコミュニケーション、教育、臨床検査技師としての知識・技術の継承と向上、患者さんの心・命、自分の人生の役割などについてお話いただきます。対談のなかで、山藤先生が感じた医療とのつながりの部分を、心の「共振」ポイントとして解説を加えていただきます。



イーオンの特徴と学校の英語教育

三宅：はい。イーオンは英会話学校で、今年が創業44年目となります。いま、全国に251の直営校があり、受講生は約77,000人です。1歳半の子どもから80歳代の方まで幅広い年代の受講生の方が、受験、自己啓発、趣味、ビジネスなどさまざまな目的で英語を学ばれていることが特徴です。

編集室：私は、学校で学んだ英語はすっかり忘れていますが、話すなんてとてもとても…という状態ですが、私のような方でも、イーオン様に通えば上達できるのでしょうか？ 英語だけは苦手で…、という方も多いと思います。

三宅：私がいつも言っていることなのですが、「学校で英語を学んだけど、全然役に立たない」と皆さんおっしゃるんですが、考えてみてください。学校で数学を習ったからといって、いま、三角関数や微分積分が解けますか？ 美術を習ったからといって、絵が上手に描けますか？ 音楽を習ったからといって、ピアノを弾けますか？ 他の教科だって、学校で習ったけれどできないことがいっぱいありますよね。なのになぜ、英語だけは「学校で習ったのにできない」というふうに言われるでしょうね(笑)

山藤 & 編集室：確かに！(笑)

三宅：それでは、学校でやったことは意味がなかったのかということではなく、学びの基礎となっているんです。イーオンには、「学校英語、感情込めれば英会話」という格言もあります。「日本で英語を勉強したけど全然話せなくて、海外に行ったら3カ月で話せるようになった」というような話を聞いたことがあると思いますが、日本の中学・高校で基礎の勉強をしているからこそ3カ月で話せるようになるわ

けです。「何をしたらできるようになりますか？」と秘訣のようなことを聞かれることもよくありますが、英語は「〇〇だけで上達する」ということではないです。文法学習、単語を覚える、聞く話す練習など、総合的にバランスよくやることが上達するうえで一番大切です。

英語という教科は、単語を覚えたり文法を勉強したりする「学習」であると同時に、話したり書いたりするトレーニングが必要な「実技科目」であると考えています。

英語は「筋トレ」

三宅：ですから、英語を身に着けるには、しっかりとトレーニングすることです。私は今日の朝も20分、英語の音読をしてきました。山藤先生はスポーツ医学の専門家でいらっしゃいますが、英語の勉強は実は楽器やスポーツと共通するものが多くて、上達するにはいい先生から習うということと、日々の練習が大切だと思います。私はいま、趣味として心身統一合気道、ピアノを習っていますが、練習が大切という意味で英語学習ととても似ています。

山藤：三宅社長はピアノも大変お上手なんですよ！

三宅：いえいえ、好きなだけです。

英語のスキルが、グングン右肩上がりに伸びたらいいですね。でも実際は、勉強しても伸びない時期があります。停滞期と伸びる時期の繰り返しです。

山藤：確かにスポーツと同じですね。僕は小学校の頃からずっとサッカーをしていましたが、毎日練習していても上手くなったという実感が小学生の頃、どこにもなくて…。

三宅 & 編集室：(笑)

山藤：でも、ある日試合のときに、“あれっ、

いままでできていなかったプレーが今日はできた”ということがありました。上達するっていうのはそういうものだと思います。その瞬間が訪れるまでの毎日の積み重ねがあるからできたんですね。

三宅：その通りだと思います。スポーツでは、トレーニングを怠けると、どんどんパフォーマンスは落ちていきますよね。英語も同じで、何もしないと英語力は落ちていく一方です。だから英語が上達するためには、ある程度の時間を使って毎日練習する必要があります。英語はスポーツと同じで「筋トレ」です！イーオンでは、英検1級、TOEICテストで満点を持っている教師ほど、毎日「筋トレ」していますよ。

山藤：三宅社長はいつもそうおっしゃっていますよね。英会話スクールで社長が英語は筋トレ！なんて言っている会社はありませんよ（笑）。でも本当にその通りで、僕は至言だと思っています。実は、僕もいままさに「筋トレ」中でした（笑）。イーオンに入会して勉強中の身なんです。三宅社長とは知り合いであることを隠して（笑）あるイーオンのスクールに説明と体験入学を受けに行ったのですが、そのスタッフの方の対応やスクールの雰囲気が明るくて本当に素晴らしく、楽しく学べそうだと思います。そのまま入会しました。

授業の初めには目的を聞かれました。「これまで医師として論文を読んだり発表したりと英語を使う機会はありましたし、サッカー日本代表チームのドクターとして海外遠征したことも何度もありましたが、純粋な英会話の勉強というのは、受験勉強も含めてしたことはありませんでした。永続的に英語を学んでいきたいという気持ちをずっと持っている中で、東京2020

オリンピック・パラリンピックに、東京都サッカー協会の医事委員長として、国立競技場で行うサッカーの試合などにもより責任ある立場でかかわるので、これをよいきっかけとして英語をちゃんと学びたいと思いました」ということをお話しました。1回目から僕の目的にあった指導をしてくださり、また雰囲気がいいので楽しいです！

三宅：それはよかったです！（笑）。山藤先生は英語の基礎力があるうえに度胸もありますね。非常に明るくて前向きで、人とのコミュニケーションが上手なので、イーオンで英会話を勉強されると、いくらでも上達されると思います。楽しみです。

山藤：ありがとうございます。頑張ります。

学びには支えと環境が必要

山藤：実は、先ほど三宅社長が言われた、「毎日勉強しても、皆が期待する右肩上がりの順調な成功曲線にはならないよ」という話を、うちの臨床検査技師専門学校の1年生にもしているんです。皆、医療の勉強は初めてなので、“全然わからない”と心が折れそうになるときがあります。「わからないけど、勉強頑張らなくちゃ」と積み重ねていったら、実習に行ったときに知っている知識が増えていたとか、あるとき、突然、解けなかった問題ができた、となるから毎日一生懸命頑張ろう」と励ますんです。

三宅：英語も同じです。順調な右肩上がりではなく、（階段状の絵を描きながら）このような我慢の時期が必ずありますから。そして、やはり勉強は、誰かが寄り添って挫折しないように応援してあげるといいですね。努力しても伸びない時間は長く、伸びたという感動の時間は一瞬ですから。



山藤：驚きました。偶然ながら、私も三宅社長と全く同じ階段状の絵を黒板に書いて、学生に伝えています！そしてその伸びない時期を支えながら共に歩むのが、イーオンにおける教師の役割なんですね。

三宅：逆に私からお尋ねしたいのですが、山藤先生のお書きになった『社会人になるということ』（幻冬舎刊）を以前に読ませていただきました。素晴らしい内容で感動いたしました。その中で、山藤先生の学校では挨拶や掃除が大事ですよという、勉強や資格試験に必ずしも直結しないようなところからの指導をしていらっしゃるんですね。そして、国家試験に全員合格して全員で泣く、あるいは何人が落ちて皆で泣くとうかがいしていますが、そのチームワークはどのように作られるんですか？

山藤：一言で言うのは難しいですが…、1年生のときから、私や教員も含めて、クラスの皆、学年の皆、学校の皆で何かに取り組む、というワークは比較的多くやっています。先生たちも一緒に皆で高尾山に登るというのはわかりやすい例ですが、講座の中でも、例えば、なぜしこジャパンが世界一になった映像を皆で見、なぜ世界一になれたのか、その本質部分を全員で話し合う、というようなワークを行っています。秘密の裏話は僕がそっと披露していますが…(笑)。そして、さまざまなワークを始めるときには、僕がまず目的などを話して、最後に必ず、皆に「感じたこと」という感想文を一人一人書いてもらいます。

感じる感性というのを教育の中でとても大事にしているつもりです。1つの具体的な例として、先日、新1年生と高尾山に登ったときのことをご紹介します。まずは麓で、ゆっくりと呼吸を整えるところから始めました。そうする

と、それまで聞こえなかった葉っぱの音や川の流れが聞こえてきます。皆の心が落ち着いた後、私から今回の目的を3つ話しました。まずはいつものせわしい結果だけの毎日から抜け出し、ゆっくりすること、2つ目に自然の中で感じることを大事にしようということ、最後につながるということを感じることで、まずは自分とつながること、そして仲間や先生、自然とつながることをテーマとしているということです。学生に書いてもらった感想文を見ると、自然や友達に対して身近に感じるようになったというものが多くありました。自然の中でワークをすると、なぜか皆、自然と仲良くなるんです。僕は、世の中も社会も、広いつながりだと感じたときから、なぜだか許される感じがしていて、“大地や天地に広くつながると、居場所があるよ”という話を、結構まじめに学生にしています。学校も同様で、まずは、自分の居場所があるということ、その場、環境を作ることが、学校としてとても大事なことだと思っています。勉強に、直接は関係なさそうですが(笑)

三宅：直接は関係なくても、心が落ち着いて、安定している状態で勉強に向かえる、その環境を整えてあげると成果も違うと思います。

山藤：そう言っていただき、ありがとうございます。うちの学校は定員が80人で、臨床検査技師の学校としては多い方なんです。80人もいれば、勉強好きな子、スポーツ好きな子、ゲーム、アニメ、それこそ英会話が趣味の子もいるかもしれませんし、誰かとつながれますよね。まず、そうやって居場所を作ってあげることが大事だと思っているんです。個人があって、集団があります。その全てにつながりと感謝の心を持てるようになると、そして目的が見

えると、チームとしてのまとまりは自発的に出てくるのかもしれませんが。

物事には入り口が重要

三宅：先生の学校のその大きな目的というのはなんですか。

山藤：はい、実は、シンプルに、「この学校の門を叩いて入ってきた学生が1人でも多く臨床検査技師の資格を取り、その後幸せになること」がこの学校の存在意義です。でも、実はこのような学校はあまりありません。他校では、国家試験の合格率を上げること、学生募集にたくさん集まること、優秀な学生に来てもらうこと、などを運営側の目的にしていることが多いからです。しかし本校では、教員は大変ですが、丁寧に学生を見ていますので、他校に比べて卒業生の数は多く、留年や退学者の数も少ないんです。僕はオープンキャンパスのときには必ず、「この学校に入学したら、臨床検査技師になるのは夢じゃなくて志になるんだから、試験に合格して資格を取るために毎日勉強するんだよ。だから、いまの成績はともかく、志だけはちゃんと持ってこの学校に入ってきてね」という少し厳しい話をするんです。勉強はやらされているものだ、という意識の学生さんも多いと思いますが、よりよい臨床検査技師になるために、いろんな学びをしたいというふうに思えるよう、心がどこかでシフトできるといいなと思って。

三宅：オープンキャンパスでは毎回先生が話をされるのですか？

山藤：はい。毎年30回くらいあるので少し大変ですが、物事には入り口が大事だと思うので、僕が毎回話しています。このときには、「志がなくてただ試験に受かればいいやと思っ

ている人、自分さえ試験に受かればいいという人はこの学校に向きません」という話もしますが、不思議なことに、厳しいことを言っても、うちの学校に応募してくる学生数は増えているんですよ。心身統一合気道会会長の藤平信一先生から、「三宅社長も、会社説明会ではご自身がお話をされていますよ」とうかがったことがあります。いかがでしょう。

三宅：会社説明会で私は、会社の理念、英語教育、私の考え方などについて1時間ぐらいお話をし、最後に、彼らのこれからの就職活動や、社会に出て働くときのために3つのアドバイスをします。私は、会社説明会からもう研修は始まっていると思っています。私はこう考えている、イーオンの考えはこうだよという、その考えに共鳴してくれる学生が応募してきてくれるので、会社説明会は大変重要だと思っています。

話は戻って3つのアドバイスですが、1つ目は、人の話を聴くときの態度、心を向けて傾きながら聴きましょうということです。人は自分の話を聴いてくれる人が好きです。2つ目は、言葉の大切さです。ネガティブな言葉が口癖の人はネガティブな人生になるし、プラスの言葉が口癖の人はプラスの人生になります。自分の言葉を一番近くで聞いているのは自分です。プラスなものもネガティブなものも全部、瞬時に自分に入ってきますよと。3つ目は、全てのパフォーマンスには、何をやるかということと、そのときの心の状態があるということです。心の状態がパフォーマンスの質を決めます。何をやるかは選べないこともあります。でも、どういう心でやるかは常に選べるので、自分の機嫌は自分で取りましょうということです。

最近の若い人は、こういう話をあまり聞いた



ことがないのか、すごく熱心に私の話を聴いてくださいます。こういう話をもっといろんなところでしてあげれば、彼らもどんどん吸収することができるのと思いますね。

山藤：全く同感です。さすがです。素晴らしいですよ！

三宅：私どもは全国に251の直営校があり、海外から来る外国人教師もいますので、私が入社してくる社員、教師全員に会うことはできません。ただ、全ての方に、必ず私がSkype™でお話をするようにはしています。外国人教師も日本人教師も、よくこれだけいい人が来られると思うくらい、人には恵まれていると思いますね。プラスがプラスを引き寄せる法則のようなものがあるのか、いい生徒さんも多く集まってくださり、本当にありがたいな、と思っています。

山藤：三宅社長から、氣が出ている感じがしますね。

三宅：やはり、私の明るさ以上に会社は明るくならない、私自身のエネルギー以上に会社のエネルギーは出ないと思うので、いい意味での責任を感じています。

英語習得が日本語表現も強める

山藤：うちの専門学校では、英語のみならず、日本語表現法という授業も行っています（「検査と技術」誌46巻1号、58～66頁参照）。高校生までは生活の中心がスマートフォンでも生きてこれたでしょうが、これからはそうはいかない、ちゃんと日本語で表現するところから始めよう、ということで、この授業では日本語でのコミュニケーションワークをするんです。

三宅：日本語できちんと自分の意見を表明し

たり議論ができない人が英語になっていきなりできるわけがないので、日本語のコミュニケーション能力は大事ですね。だけど実は、逆に、英語を学ぶことで、日本語としても自分の言いたいことを言う訓練になる面もあるんです。

山藤：えっ、どういうことですか？

三宅：言葉は文化とも密接に関係していますので、日本の文化は一步引いて下がってお辞儀をして、和を尊ぶ察しの文化。西洋の文化は前に出て行って、相手の目をしっかり見て握手をして、言いたいことをしっかり主張する文化です。英語はそういう文化から出てきた言葉なので、英語を勉強していると積極性が身に着いて、日本語におけるコミュニケーション能力も上がってきます。

山藤：なるほど。それは初めて聞きました。これは感服いたしました…。英語を学ぶことが、日本語でのコミュニケーションを学ぶいいトレーニングになるんですね。

三宅：そうです。これからの時代、一步下がって和を尊ぶという日本の文化を大事にしながら、英語で議論するときにはしっかりと言いたいことを主張することも必要になってくると思います。

山藤：確かに！ 英語も日本語も両方学ぶのがいいですね。僕は英語も習っていますが、実は、美しい日本語を学ぼうと、大和言葉の本を読んでいるんです。万葉集に『しきしまの 大和の国は 言霊の さきはふ国ぞ まさきくありこそ』という柿本人麿の歌（日本という国は言霊があふれていて言霊が幸せをもたらす国です。私が「ご無事でいてください」とあなたにお声がけすることによって、あなたのご無事でいらっしゃいますように、という意味）があります。これは大和言葉で日本の話なんですが、

三宅社長のおっしゃっている英語のお話の中にも言霊に近いものを感じました。

ことだま 言霊の力

三宅：言霊ということで、おもしろい話があるのでご紹介します。イーオンの社員には、心身統一合氣道会の氣のテスト(臍下^{せいか}の一点に意識を静めた状態では、人から押されても全く動かない。「検査と技術」誌45巻4号、478～485頁参照)を見せることがあります。その中で、「ありがとう」と言う言葉の威力で姿勢が安定するのを実際に体験することができるワークがあります。外国人教師対象の場合、全て英語で行うのですが「Thank you」のところだけは、「ありがとう」と言ったほうが力強いのです。日本語の言葉の強さってあるのか、と感じますね。

山藤：これを、英会話の会社の社長さんが言われているのがいいですね(笑)

三宅：(笑)。イーオンの社内は、「ありがとう」という言葉であふれています。以前は、会議が休憩になるときや、帰宅するときには「お疲れ様でした」と言っていました。でもいつの頃からか、「ありがとうございました」に変わったんです。やはり、プラスの言葉で仕事をしていると疲れませんね。「ありがとう」の言葉が多いのは、イーオンのプラスのエネルギーの源だと思っています。

編集室：「ありがとう」という言葉はいいですね。『社会人になるということ』の冒頭にも書かれていますが、山藤先生も「ありがとう」という言葉を大事にしていच्छいますね。

山藤：はい。僕自身もそうしていますが、グループやペアになって勉強してもらうことが多いので、うちの学校の学生にも、必ず「ありが

とう」という言葉を発し続けよう、という話をしています。病院実習用のマニュアルにも、最後に「お疲れ様でした」と言われても、「ありがとうございます」って返すようにと書いているほど、「ありがとう」を徹底しています。そして、いまどきの大学教育ではない光景ですが、授業前には必ず全員で「よろしく願ひします」、授業後には「ありがとうございました」の号令をしているんです。

三宅：そのように、きちんと言葉として発するのは大事ですよ。イーオンでは、「ありがとう」の言葉で会社の雰囲気や社員が明るくなりましたが、それが生徒さんにも伝わるのでしょ、う、「イーオンに行くくと元気になる、前向きになれる、人生が明るくなった」などと言ってくる方がとても多くいらっしゃいます。結果、長く習ってくださる方も多く、先日調べましたら、15年間習ってくださった方が何百人もいらっしゃいました。イーオンが人の人生を明るく前向きにできる、というのは、一企業の社長として幸せなことです。

山藤：すごいですね。やはり「場」なんですよ。うちの学校は規律や礼儀に割と厳しい学校ではありますが、卒業生のうち半分くらいの学生が、皆勤賞(3年間、無遅刻・無欠席・無早退)で卒業式の舞台に立つんです。30～40人が舞台に上がる様は見えて感動的ですからあります。「やらされている」という感覚だったら、毎日学校に来ないですよ。僕は、三宅社長同様、明るくて楽しい場を作ることが、学校長としての使命だと感じています。

器械化とコミュニケーション

編集室：この雑誌の読者向けに、私から三宅先生にぜひともお聞きしたいことありますが、



よろしいでしょうか。

三宅：はい、何でも聞いてください(笑)

編集室：ありがとうございます。臨床検査については、近年、臨床検査の自動化(器械化)が進み、いままで臨床検査技師さんが手で行っていた仕事が器械に置き換わってきています。英語についても、スマートフォンの翻訳ソフトなどが開発され、必ずしも人が訳さなくてもいいようになってきており、両者、似たような状況にあると思います。そこで、これまで人が行っていたことが器械で代替可能になってきていることについて、三宅先生はどのように考えていらっしゃるかお聞かせください。

三宅：はい。「自動翻訳が発達してきて、将来、英会話の勉強はいらなくなるのではないですか?」というご質問も時々受けるようになってきました。イーオンにはビジネスマンの方も多くいらっしゃるの、その声を紹介しますと、まず、英語のプレゼンテーションは事前に準備していけるし、その内容に関する質問に関しては、なんとか答えることができる。でも、仕事が終わった後のパーティーや懇親会、食事会で話せなくて困るという方が多いんですよ。食事会で、ワインを飲みながら自動翻訳で会話するなんてあり得ないですよね(笑)。また、会社の会議の場では、丁々発止で相手の議論にかぶせていくことも多いので、自動翻訳を使う暇なんてないとおっしゃいます。スポーツに関しても、試合中に、自動翻訳でレフェリーに抗議するんですか?(笑)できるわけがないですよ。つまり、瞬時のリアルなコミュニケーションでは、あまり現段階の自動翻訳は役に立たないんです。他方で、医療に関しては、海外で病気になったときに、自分の病状を自動翻訳機で英語に翻訳してもらい、病院で治療を受けられ

るのは便利ですよ。

だから、自動翻訳を対立軸で捉える必要は全くなくて、英語の勉強に力強い味方が増えていると考えればよいのではないですか? 昔はFEN(現 AFN)放送だけが唯一の英語の音源でしたが、いまはDVDでもCDでも2カ国語放送でもネットでも、いくらでも英語の勉強ができるツールがあるわけで、技術の進歩は素晴らしいことです。

編集室：なるほど、臨床検査技師さんにも参考になると思います。ありがとうございます。

山藤：以前、あるスポーツ選手が、「英語ができるようになったら、アウェーがホームに感じた」と言っていたのが印象に残っています。確かにそこに安心感は生まれますよね。

三宅：今年の1月に、イーオンはラグビーの日本代表の公式語学トレーニングサポーターとして選手の皆さんの英語力向上を応援することを発表いたしました。アスリートで英語を学んでいらっしゃる方は最近多いです。

充実した前向きな人生が人を幸せにする

山藤：英語も臨床検査分野も器械化が進んでいますが、最終的にはやはり、そこに勤務されている人が醸し出すものが大事だと思います。三宅社長から、この雑誌の読者へメッセージをいただけますか。

三宅：はい。医療の技術の勉強をしっかりされることはもちろん大事だと思いますが、それとともに、心の温かさや優しさも大事にしてください。それが必ず伝わって、患者さんの安心感、頑張ろうという気持ちにつながると思います。そしてこれは、イーオンの社員にも言っていることですが、その人の人生全般が前向きで楽しくて幸せであれば、それが生徒(患者)さん



写真 対談場所であるイーオン東京本社にて
(左：山藤先生、右：三宅社長)

にも伝わっていきます。いい教師は充実したいプライベートを過ごしています。医療者も同様だと思います。患者さんによりよい医療と安心を与えるために、ぜひとも、ご自身の人生そのものを充実させてください。

山藤：ありがとうございます。英会話を始めるのも、人生を充実させる1つの方法ですよ？

三宅：もちろんです。英語を勉強すると、英語の記事や文献を読めるようになり、世界中に友達もできます。ある先生が「英語は窓だ」とおっしゃっていましたが、その通りで、英語を使うことで自分の目の前の窓が大きくなって世界が広がり、人生が豊かになりますよ！

山藤：それでは、本当に最後になりますが、この対談は、“人の心に寄り添う医療人になる”というテーマの連載なんです。三宅社長にとっての“人の心に寄り添う”とはどういうことか、お聞かせください。

三宅：その人を見て、目標を一緒に見るということだと思います。英語の勉強に関していえば、「そうだよね、無理だよ、できないよね」ではなく、「それはわかるけれども、こういったことも考えてやってみたらどうか」という

ように、あるべき方向へ持っていったあげることです。私が見る限り、自分がいまでも英語をしっかりと勉強している教師は優しいアドバイスをすることができ、英語の勉強をやめてしまっている教師は指導が厳しくなる、という傾向があります。日本人教師も、英語の一学習者です。日々、自分も勉強して悩んでいるという経験をしている人は、“一緒に学んでいこうね”という思いからアドバイスができ、カウンセリングも優しくなって、まさに人の心に寄り添うことができるのだと思います。人生においても、自分が悩みながらも一生懸命生きている人は、その人に寄り添うようなアドバイスができるのではないのでしょうか。

山藤：本日は素晴らしいお話をありがとうございました。大変勉強になりました。僕も英会話という名の「筋トレ」、頑張ります。

編集室：ありがとうございました。

(了)



以前より、私は三宅社長とお話をさせていただくたびに、その前向きな情熱と素晴らしい人柄に惹かれています。そしてトップとしての経営方針がまた素晴らしく、いつも共感と尊敬の眼差しを向けております。今回の対談も英語教育を中心にはおいてありますが、三宅社長の人としてのあり方、人材育成という広い視野での話をたくさんうかがうことができ、読者の方も英語のみならず、何かに前向きにチャレンジしたい気持ちになったのではないでしょ



うか。

人の心に寄り添うとは、という間に対して、まず、その人を見て、目標を一緒に見るということ、とお答えになっていました。これは、一緒に心身統一合氣道の稽古をしているときに、三宅社長から特に感じる、素晴らしい感覚と同じだなと思いました。三宅社長とは違い、私はまだ未熟者ではありますが、心身統一合氣道の技は、まさに相手と同じ方向を見て、導くものであります。稽古や実践が結びついている、まさに三宅社長らしいお答えだと思いました。また、自分が悩みながらも一生懸命生きている人が、人に寄り添うようなアドバイスができるのではないかとおっしゃっていました。三宅社長が就職説明会で話すという、自分のパフォーマンスは自分の心で決めている、自分の機嫌は自分で取るという話とも、つながる話だと思います。やはり人は、色々なものを背負って生きています。それでも、自分を整えることで、周りへの影響は変わってきます。私自身、医療人として、また教育者として、自分自身のあり方をあらためて見つめ直し、前向きに進むためのいい時間と

なりました。皆さんも刺激をもらい、大いに共感されたのではないのでしょうか。

そして私は、最後に三宅社長がおっしゃっていた、英語は「窓を広げること」という言葉も印象に残りました。そして、同時に、「窓をずらす」ということも思いました。ずらすというのは、ここにある窓ではなく、別の窓が開かれるという意味です。いまある既存の概念ではなく、違う窓も開くことで、違う視野から、違う見方ができる。そのことでまた違う自分の可能性は広がる、そんな気がしました。それが私が三宅社長に共感し、イーオンで英会話を学んでいる理由でもあります。私も自分の窓を広げ、違う窓を開くことで、より人生を豊かにし、そしてそれをまた人につなげられるよう、自分を磨いていきたいと思いました。「初心忘るべからず」。さて、今日も帰って「筋トレ」(英会話練習)するかな！

(山藤)

本連載に関するご質問・感想などは、編集室(e-mail: kensa@igaku-shoin.co.jp)までお寄せください。



山藤 賢(さんどう まさる)氏 プロフィール

1972年東京都生まれ。昭和大学医学部、同大学院医学研究科外科系整形外科学修了。医学博士。小学校から高校までは私立暁星学園サッカー部で活躍。東京都大会で優勝した他、全国大会にも出場した。現在は臨床検査技師教育に特化している昭和医療技術専門学校の校長として学生の育成にかかわる傍ら、現役の臨床医として患者とも向き合う。医療法人社団昭和育英会理事長、横浜つづきメディカルグループ代表として医療機関を複数経営。日本臨床検査学教育協議会においては、副理事長を務め、2014年には学会長の任も務めた。また、なでしこジャパンのチームドクター(オリンピック、ワールドカップなど帯同)、東京都サッカー協会医事委員長(現)を務めるなど、スポーツドクターとしても活躍している。また、2013年の著書「社会人になるということ」(幻冬舎 刊)は、丸善日本橋本店にて、週間ランキング1位(ビジネス部門)になるなど、その活躍は、医療界にとどまらず、広いフィールドで注目されている。

■ 訂正とお詫び

「検査と技術」45巻8号(2017年8月号)852～861頁掲載の「人の心に寄り添う医療人になる」欄『英語は「筋トレ」である』に関しまして、以下のとおり訂正いたします。

■ 858頁 右段7～8行目

誤) 授業前には必ず全員で「よろしく願いしました」

正) 授業前には必ず全員で「よろしく願いします」